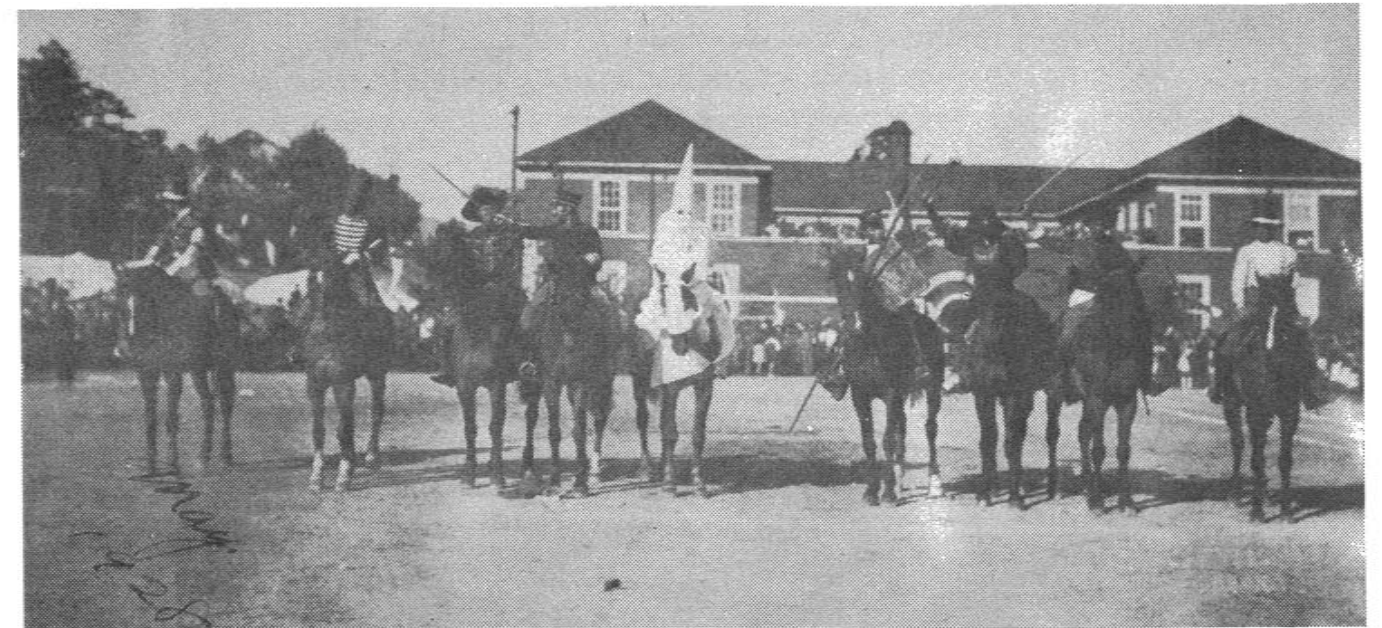


神戸大学学報

No. 486

1997.3 庶務部庶務課発行



神戸高商創立25周年記念祭における仮装行列（昭和3年）

目	次
◇学内ニュース 2	・平成9年度日本学術振興会外国人招へい研究者の採用
・停年退職教授からの寄稿文	・平成9年度日本学術振興会外国人特別研究員の採用
・新役職員紹介	・平成9年度日本学術振興会特定国派遣研究者の内定
・第32回全国文献・情報センター長会議の開催	・平成9年度日本学術振興会国際研究集会の内定
・第11回神戸大学医学部学術講演会の開催	・平成10年度日本学術振興会各種事業の募集のお知らせ
◇人事 17	◇掲示板 25
・異動	・日誌
・各種委員会委員の異動	◇神戸大学100年史編集室だより 26
・研修	
・海外渡航	
◇学事 21	
・平成9年度文部省在外研究員派遣予定者の決定	
・平成9年度国際シンポジウムの決定	
・平成9年度国際研究集会派遣研究員の決定（第I期）	

学内ニュース

◇停年退官教授からの寄稿文

このたび、本学を退職される20名の教授の方から、本学における思い出等をお寄せいただきましたので、ここに紹介いたします。

(職歴は本学関係のみ)

向井 守 (文学部)

昭和9年3月20日生

(学歴)

昭和31年3月

大阪市立大学経済学部
経済学科卒業

昭和37年3月

京都大学大学院文学研究
科博士課程単位修得退学



(専攻)

西洋哲学

(略歴)

昭和46年4月 神戸大学助教授 (文学部)

昭和58年5月 " 教授 (")

平成9年3月 停年退職

《在職26年》

前方に海が見え、後方に六甲山がひかえる美しい環境にある神戸大学で27年にわたって過ごした日々は、おそらく私の人生における最良の時であったであろう。この間さまざまな人文科学や社会科学の一流の学者の方々から耳学問をさせていただき、大いに教養を積むことができた。なににもまして貴重なことは、心を許すことができる何人かの友人を得たことであった。彼らのおかげで、どんなに励まされ、勇気づけられ、慰められたことか。いくら感謝しても、感謝しきれないと思う。私は事務的能力がないために、同僚や事務の方々にもいつも迷惑をかけた。にもかかわらず、寛大に接していただき、心から感謝申し上げる。

青木 庸 效 (国際文化学部)

昭和8年7月19日生

(学歴)

昭和31年3月

神戸大学教育学部四年課
程英語科卒業

昭和32年3月

" 文学部専攻科修了



(専攻)

現代イギリス文学、英語授業学

(略歴)

昭和34年4月 神戸大学助 手 (教育学部)

昭和39年4月 " 講 師 (教養部)

昭和42年1月 " 助教授 (")

昭和54年1月 " 教 授 (")

平成4年10月 " " (国際文化学部)

平成9年3月 停年退職

《在職38年》

鶴甲の地に教養部の校舎が建ち始めたのは昭和38年であったと記憶しています。完成の順に少しずつ御影分校が移転を始め、昭和39年度に教養部が正式に発足しました。私はその春教育学部から移ってきたのですが、それから早いもので、引き継いだ国際文化学部も入れて、33年になります。教育学部には5年いましたので、神戸大学の勤務は通算38年ということです。これまでの人生の半分以上を神戸大学で教えてきたことになりましたが、その前の3年間は公立学校の教師、さらにその前の4年間は神戸大学の学生でしたから、淡路島の半農半漁の町から初めて神戸へ出てきてから45年の歳月が過ぎてしまいました。私の人生にとって神戸大学がどれほど重い存在であったかをしみじみと感じているところです。

この間、学園紛争をはじめ、種々のことがありましたが、外国文化と外国語教育を中心に研究することができたことを非常な幸せと考えざるを得ません。最後の勤務の国際文化学部でも、応用言語学の周辺を当初からの一貫した流れに添って扱うことができたのは大変な幸運であったと感謝しています。

いま、停年に際し、尊敬する先輩や同僚にかこまれてこれまでの生涯の3分の2の年月を神戸大学で過ごすことのできた幸せをつぶさに感じながら、神戸大学の今後の益々一層の発展をお祈りしています。

小松原 千 里 (国際文化学部)

昭和8年9月17日生

(学歴)

昭和32年3月

大阪外国語大学外国語学
部ドイツ語学科卒業

昭和34年3月

大阪大学大学院文学研究
科修士課程修了



(専攻)

ドイツ文学、比較文化学

(略歴)

昭和39年4月 神戸大学講 師 (教養部)

昭和42年4月 " 助教授 (")

昭和51年4月 " 教 授 (")

平成4月10月 " " (国際文化学部)

平成9年3月 停年退職

《在職33年》

「退官の辞」

神戸大学教養部に赴任したのは、私の30歳の年である。以来、33年になるから、神戸大学一筋というべきか。が、私にとっては「一筋」というような思いはない。むしろ神戸大学は私の人生そのものだった、と言う方がいい。だから大学の思い出を語ることは私の人生そのものを語ることになり、そして人生とはそう容易に語ることはできないものだから、こういう文章を書かされると非常に困る。しかし顧みて、少なくとも言えることは、私の人生は恵まれていたということである。そして恵まれていたとするならば、やはりそれは神戸大学の生活が恵まれていたということになるだろう。

私はドイツ語教師に終始した。私の場合、この外国語をいかにして学生の頭脳に刻みつけるか、毎時間が学生さんたちとの静かな、そして充実した作業だった。しかしいつの頃からか事態は変わった。大学紛争が契機になったのであろうか、日頃教室の中で懸命に辞書を引いていた学生さんたちがとつぜん変貌した。そしてあの頃の時期を境にして教師と学生との関係が大きく変わったと言える。

そして神戸大学にかぎるわけではないが、教養部が批判の対象となったようだ。やがてこの大学でも教養部は廃絶され、時流に乗って、国際文化学部となった。学生さんたちの顔を見ていると、一語学教師として居直っているわけもゆかず、新しくつくられた講座に応じるべくさまざまな講義も行い、それなりに充実した時をもてたが、しかし不思議なことに、外国語を学ぶということが文化の交流のもっとも基本的な「実践」であるはずなのに、そのことが大学から、のみならず国際文化学部からすら忘れられているようなのである。当然、学生さんたちも年々語学を学ぶだけの忍耐を失ってゆく。何であれ自分で読み解こうとする精神力を失ってゆく。そんななかで語学の授業は、もう学生さんたちの怠惰との戦いであった。

その後、ドイツ語教師、のみならずそもそも教

師という「古典的」なイメージをまったく消え失せた。すべからず専門家という肩書きが幅をきかし、ひいては学生の方もそれに応じて、人間いかに生きるべきかではなく、わたしは何になるべきかが関心事になった。以後、「学ぶ」ということの本質への問は忘却されたまま、忘却されたことすら忘却されたまま今に至っている。そして今ようやく私の人生も神戸大学から離れてゆく。何か摂理のような気もする。私の人生はふたたび、若いころに味わった貧乏な書生生活へかえってゆく。そしてそれが33年間の国立大学における教員生活の果に恵まれた生活であるならば、文句はない。これまた摂理というべきである。そこで一句…

春を愁ひ貧者にかへる家路かな

平成9年2月28日

小 野 理 子 (国際文化学部)

昭和8年9月18日生

(学歴)

昭和31年3月

京都大学文学部文文学科
卒業

昭和39年7月

ソビエト連邦モスクワ大
学文学部大学院単位取得
退学



(専攻)

ロシア文学、ロシア社会論・文化論、西洋女性文学

(略歴)

昭和44年4月 神戸大学講 師 (教養部)

昭和46年6月 " 助教授 (")

昭和56年4月 " 教 授 (")

平成4年10月 " " (国際文化学部)

平成9年3月 停年退職

《在職28年》

「『卒業』にあたって」

教養部に着任したのは、1969年4月「大学紛争」の真っ最中だった。教養部は封鎖されており、法学部玄関の柱のかけで辞令をもらったのが妙に印象に残っている。

たちまち学生との「大衆団交」への出席、連日の教授会での議論、封鎖解除後の「体を張って」の授業、となかなか忙しく、国立大の教員になればさぞかし勉強できるだろう、という甘い予想はのっけからはずれたが、反面、共同のいろいろな作業をつうじて多くの教官・職員の方々と急速に

親しくなった。

初期のロシア語履修生には、自己主張の強い、元気一杯の若者が多かった。封鎖による長い自宅待機のあとようやく始まった授業だったせいもあるが、欠席者はほとんどなく、あとのクラス討議では教師の意見も求めて来た。私も若かったから、歯に衣きせず「大学解体論」の間違いなどを指摘した。教室ではわずか1年半か2年のつきあいだったが、その頃の数え子の十数人と今日まで文通が続いている。

研究者にとっての教養部勤務のマイナス面は、すでにしばしば指摘されて来たとおりでである。初歩の語学や数学を週6コマ7コマと毎年繰返して教えながら、専門分野での第一級チャレンジャーであり続けることは容易ではない。しかし私は、他大学にさがけて女性を偏見なく受入れてくれた、そしてたくさんの耳学問・目学問をさせてくれた多様な専門の同僚諸氏には、常に感謝していた。資料の検索その他でお世話になった図書館員をはじめ職員の方々へと共に、心から御礼を申し上げたい。

国際文化学部が発足して4年、私はその第一期生とともに神戸大学を「卒業」する。彼女ら彼らは、学部の新校舎さえない、海のものと山のものともわからぬ新学部へやって来て、自分たちの手で未来を拓いた。私たちも、彼女ら彼らとともに成長した。大学教育研究センターと学部教育の両方を担う超多忙のなかで、多くの若手教官が研究に新分野を拓きつつある。この学部の可能性にひろく全学のサポートを頂くよう、願っている。

堀 信 夫 (国際文化学部)

昭和8年11月27日生

(学歴)

昭和33年3月

東京大学文学部国文学科
卒業

昭和35年3月

東京大学大学院人文科学
研究科修士課程修了

(専攻)

俳諧文学、日本近世文学、日本伝統文学、茶の湯文化論

(略歴)

昭和50年4月 神戸大学助教授(教養部)

昭和56年1月 " 教授(")

平成4年10月 神戸大学教授(国際文化学部)

平成9年3月 停年退職

《在職22年》

「ご挨拶」

私は22年前の昭和50年4月に神戸大学に赴任した。今回停年退職する教官の中では、在籍期間が比較的短いほうであろう。しかし、その22年の間にも、忘れ難い思い出はいくつかある。その一つが山口誓子学術振興基金のことであり、もう一つが教養部をめぐる大学改革のことである。

昭和60年の夏休み中、当時の学長新野幸次郎先生よりお声がかかり「山口誓子氏から2万冊の蔵書と夫人波津女さんの遺産2億8千万円を寄贈したいという申し入れがあるが、君の意見はどうだ」というものであった。誓子の義弟末永山彦氏と新野学長が昵懇のゼミ仲間というご縁により起った話である。当方に異論のあろうはずがなく、早速国語国文学関係の教官が集まり、受け入れについての検討が重ねられた。その結果、附属図書館内に誓子波津女文庫を設置して市民に開放すること、および学内に山口誓子学術振興基金を設置する方針が答申された。勿論、寄贈のご趣旨が「俳句俳文学を中心とする国文学の教育研究助成、ならびに学術の国際交流の促進」であるから、その線に沿った事業が計画されているが、昨今の低金利により、正直なところ実行委員会はやりくりを頭を痛めている。ただ幸いなことに、われわれの活動は誓子氏・末永氏に評価され、再び新野先生の幹旋により誓子氏の遺産(西宮市苦楽園の土地331坪、流動資産3億円)が神戸大学に追加寄贈された。関係者の1人として万謝申し残すことばかりである。

いま一つの大学改革であるが、学内及び教養部内の多くの人びとの犠牲的精神と暖いご理解により、平成2年より新学部の設立が実行に移され始めた。その新しい国際文化学部の構想を検討する委員に選ばれたのを契機に、翌3、4年度の評議員を拝命、直接新学部の創設を担当するハメになった。幸い、平成4年10月には国際文化学部が発足、今年3月めでたく第1回の卒業生を送り出した。この間じつに多くの人びとに暖いご理解とご協力を賜った。このことに、改めて感謝申し上げたいと思う。同時に、この新しい学問分野が着実に成熟し、新学部がさらに発展することを祈念してやまない。

田 中 雅 男 (国際文化学部)

昭和8年12月27日生

(学歴)

昭和33年3月

神戸大学文学部文学科
卒業

昭和35年3月

" 文学専攻科文学
専攻(英米文学)修了

(専攻)

劇場論、英文学、英語学

(略歴)

昭和43年4月 神戸大学講師(教育学部)

昭和44年4月 " " (教養部)

昭和47年11月 " 助教授(")

昭和58年4月 " 教授(")

平成4年10月 " " (国際文化学部)

平成9年3月 停年退職

《在職29年》

「定年坂」

六甲台へ通じる学生会館脇の階段には、いくつかの忘れ難い思い出がある。先ずは、遠い昔の学生時代のこと、御影の校舎から、六甲台へ歩いたことがよくあった。確か六甲祭での演劇部の公演を見に行ったときのことだと思う。近道をしようと、一王山の参道を脇に逸れ、石屋川沿いに少し上ると、左手の川原の一段高いところに切り開かれた空き地が広がり、傍に厩舎が現れた。そこから急な山側に沿って作られた、丸太を埋め込んだ踏み段を登ると、突如視界が開けて、六甲台の校舎が見えてきた。兼松講堂での公演は、サルトルの『恭しき娼婦』、シュミーズ姿で現れた娼婦は、文学部の同級生、息を弾ませて登ってきた私には余りにも眩しい姿だった。

時は流れて、教師として戻ってきたときには、風景は一変していた。石屋川は暗渠に消え、山が削られ、ドライブ・ウェイが通り、馬場と階段はすでに現在の位置にあった。一年目私は教育学部の演習を一コマ余分に担当していたのだが、後期から新築なった現在の校舎で授業することになった。今と違って、手前に住宅が一軒も建っていなかったもので、私の研究室からは真近かに見えた。教養部で授業を済まし、十分足らずで、移動できると踏んだが、大いなる当て違い。受講生に聴くと、例の階段を登って、六甲台のグラウンドを横切るのが近いと言う。確かに近いが、息が整って授業できるまで、学生を前にして、五分ほど休憩せ

ざるを得なかった。

ところが、それから間もなく起こった学園紛争中のことである。その階段を、徹夜で対峙していた共闘派の学生集団が、早朝シュプレヒコールをあげながら駆け足で駆け登っていったのである。私は脳天に一撃を食らわされた思いで、見上げていた。それ以来、私は、たとえ遅くても良い、定年までは、途中で立ち止まらないで、登りたいものだと思心に定め、私の「定年坂」とすることとした。

それから二十有余年、国際文化学部が立ち上がって、その階段を登り下りする機会が増えた。ところが、いざ登り始めると、手摺りに縋りすがり、踊り場毎に小休止する不甲斐なさである。肉体はもう疾くくに定年を迎えていたようだ。よくまあ、ここまでもったものだ。それにしても、この斜面を利用した図書館構想が出ては消えているが、今後この階段はどうなるのであろうか。去っても気になるのは、母校である。

倉 沢 行 洋 (国際文化学部)

昭和9年3月15日生

(学歴)

昭和31年3月

京都大学文学部哲学科
卒業

昭和34年3月

京都大学大学院文学研究
科修士課程修了

(学位)

昭和61年3月

文学博士(京都大学)

(専攻)

哲学、芸術学、日本学

(略歴)

昭和37年4月 神戸大学助手(文学部)

昭和46年4月 " 講師(教養部)

昭和47年11月 " 助教授(")

昭和55年4月 " 教授(")

平成4年10月 " " (国際文化学部)

平成9年3月 停年退職

《在職35年》

大学院の博士課程を満期退学して、すぐに神戸大学に来ました。昭和37年以来ですから、ずいぶん長くこの大学にお世話になったことになります。しかし今ふり返ってみると、ほんとうに束の間でした。着任時にご指導いただいた小林太市郎先生、

谷信一先生、辻部政太郎先生、そして教養部でお世話になった田口寛治先生、また芸術学・哲学の諸問題でよく議論した岩山三郎先生。どなたも既に幽冥さかいを異にすることになってしまいました。そういえば、教養部での初講義のとき授業妨害という手ひどい歓迎をして下さった松下昇さんも、もはやこの世では会えぬ人となりました。

だが、亡くなった人々を追想はしても、「往時渺茫として……」などと老人くさいことは申しません。さいわい健康で体力も気力もあります。これからの人生は、私にとっては「余生」ではありません。研究者としても教育者としても、むしろ正念場です。そのように観じながら、人生の旅を歩み続けたいと思っています。ご指導ご鞭撻をお願いします。

武 谷 安 子 (発達科学部)

昭和8年6月29日生

(学歴)

昭和31年3月

東京芸術大学音楽学部
楽理科卒業



(専攻)

器楽(ピアノ)

(略歴)

昭和33年4月 神戸大学助 手(教育学部)

昭和45年4月 " 助教授(")

昭和55年4月 " 教 授(")

平成4年10月 " " (発達科学部)

平成9年3月 停年退職

《在職39年》

「思い出トーク研究室にて」

「先生、この度は御退官おめでとうございます。」

「さあ、おめでたいかどうかは解りませんが、自分乍らよく40年近くも勤めたものだと思います。」

「え、40年!!そんなに長く…かくいう私など生まれてませんもの…その間には随分色々な事がお有りでしたでしょうね。」

「そもそも勤め始めたきっかけはほんの些細な事でした。大学を卒業して帰神したもの何をする事がなくブラブラしていた時、当時助教授であられた小島幸先生(現名誉教授)から“神戸大学へ来ない?小学校課程の実技指導で人数が多くて大変だけど。”という思いがけないお誘いを受けたのです。私自身は学生時代から教師になる気な

どさらさらなかったもので、その時も“はあ、それでしたら…”と何の深い考えもなくお返事をした結果が、何と今日まで延々と続く神大生活の始まりとなったのですから、本当に人生いっとうなるか解りませんよ。」

「何か思い出話をお聞かせ下さい。」

「そうですね、やはり1番に思い出すのは音楽科学生達との演奏旅行、それと学園紛争でしょうね。」

「演奏旅行が出来たとは羨ましいな。どんな所へ行かれたのですか?」

「但馬、徳島、浜松など教官、学生が一緒になって小、中学校を廻り生徒達に生演奏を聴いてもらいました。殆んど体育館のような所で、しかも夏休み中のイベントだったので、暑さと集まった人達の熱気で大変でした。今のようにエアコンは無いし入口や窓もあけっ放しでしたから…そうそう或る中学校では舞台に出てみると、犬が館内に入り込んでいて通路にチョココンと座っており、びっくり仰天した事もありましたよ。」

「神大にも紛争があったのですか?」

「ありましたとも。丁度鶴甲へ移転した直後で、真新しい校舎も散々な目にありました。音楽科生の中にもかなり大学のあり方、ひいては講座の運営等にも批判的な学生達があり、授業そっちのけで討論集会を開いたりしました。でも今の学生達をみていると皆おとなしく、教官のペースにはまっている者が多いので、私自身はとても食い足りない思いがしています。もっと教官側に自分達の意見をぶつけてほしいです。まあ今はこんな事をいってますが当時は本当に大変でした。五毛天神の境内でひっそりと教授会をしたり、入試を附属明石校で行うなどてんやわんやの毎日でした。」

「先輩達は凄かったんですね…今の私達には考えられません。」

「卒業演奏会も中止になりましたよ。でもあの頃の学生達が、今はごく普通の教育ママや結構管理主義的な教師になっていたりするのをみるのも、興味深いものですよ。」

「まだ色々とお聞きしたい事もあるのですが…先生、今日はどうもありがとうございました。長い間、本当にお疲れさまでした。」

五 島 祐治郎 (発達科学部)

昭和8年8月2日生

(学歴)

昭和33年3月

東京教育大学体育学部
体育学科卒業



(専攻)

スポーツ経営管理学

(略歴)

昭和33年4月 神戸大学助 手(教育学部)

昭和39年4月 " " (教養部)

昭和41年3月 " 講 師(")

昭和45年8月 " 助教授(")

昭和56年11月 " 教 授(")

平成4年10月 " " (発達科学部)

平成9年3月 停年退職

《在職39年》

「講義の思い出」

神戸大学へ赴任し、姫路分校、教養部、発達科学部と39年間、無事、勤務させていただいたことを光栄に思っている。この間私はサッカーのコーチングとチームの経営管理に関する研究にエネルギーを注いできた。スポーツ経営論などの学問的関心は、時代と社会との文脈に強く依存する。そのため変化する社会的現象に目を配り、時代が放つメッセージを解読しつづける必要がある。

1980年代、教養部はマンネリ化した授業を解消し、学生に刺激を与えるため、従来の授業形態と異なる総合科目制度を設け、対応していた。私も1987年の後期「スポーツを観る」のテーマで開講。この科目でのねらいは多様化の著しいスポーツを学際的に広い視点で論じようというものである。当時、日本経済新聞など阪神球団の優勝とその経済的効果を取り扱っているのに着目し、このことを経済学、経営学、法学や教育学の立場より論じていくことを考え、毎週1回の計15週を5人の教官で担当することとした。教官とその講義のテーマを紹介する。プロスポーツの経営という立場から、三好一彦氏(阪神電鉄常務取締役兼阪神球団社長)に「スポーツと経営」、野口 寛氏(養、法学)に「契約論と選手のトレード」、夏目 隆氏(養、経済学)に「優勝と経済的波及効果」、美崎公正氏(養、保健体育)に「選手の健康管理とスポーツ医学」について講義していただき、コーディネーター兼スポーツ教育学の立場より五島祐

治郎(養、体育学)が「現代スポーツのコーチ論」について講義をした。講義における経営理念、チームリソース、優勝の他業種にもたらす効果、怪我・リハビリ、プロフェッショナルコーチ論など大好評で教養部D307教室(300人収容)は毎週満員であった。特に、経営者としての三好一彦氏の講義は大きな反響と話題を呼んだ。三好氏をご推せん下さった戸上 一氏(養、経済学)には感謝の念で一杯である。ご講義下さった諸先生は神戸大学名誉教授となられ、今も活躍されている。改めて良き思い出を有難うとお礼を申し上げたい。最後に、神戸大学の発展と教官職員の皆様のご多幸を祈念しつつ筆を置きたい。

奥 山 晃 弘 (発達科学部)

昭和8年10月8日生

(学歴)

昭和31年3月

東京教育大学理学部数学
科卒業

昭和33年3月

東京教育大学大学院理学
研究科修士課程修了
(学位)

昭和47年3月

理学博士(東京教育大学)



(専攻)

数学

(略歴)

昭和56年4月 神戸大学教 授(教育学部)

平成4年10月 " " (発達科学部)

平成9年3月 停年退職

《在職16年》

「神戸大学16年間の思い出」

神戸大学へまいりまして16年間大過なく無事停年を迎えることができますことは皆様のご支援、ご鞭撻の賜物と感謝致しております。

昭和56年4月教育学研究科修士課程発足と同時に赴任しました。それも全く偶然のことからで、前年に概算要求が通り設置が決まった後、担当の先生が急逝され同じ専門分野でしたので代わりに非常勤にでもというお話が発端でした。そんなことで神戸大学についてなんの予備知識もなく唯お役にたつのでしたらという気持ちでした。それから16年今度は教育研究科廃止のこの3月で去ることは切りが良いといえますか、何か因縁めいたものを感じています。

最も強く思い出に残ることはやはり教育学部から発達科学部への改組です。全く予期せず評議員に選出されそのまま首を突っ込んだとしかいいようのない気がします。初めは何が何だか分からない中で教育学部としてのこれ迄の蓄積を礎に文系と理系の垣根を越えた新しい学部にしようと夢中で進みました。受入れられるにはまだ日が浅いようですが、長い目で暖かく見守っていただき、充実にご理解いただければと念じております。

文化学研究科の改組に絡み池上忠治先生の急逝は悲しいできごとでした。ご健在でも話しが進んだとは思われませんが、“今度行ったら後の罪が閉まりますよ”といいましたら“行きましょう”といわれ、相当な覚悟の上と拝察しました。その直後に倒れられ帰らぬ人となりましたことさぞ無念でしたことと心中を察します時、今でも心が痛む思いがします。発達科学部の発足に際し博士課程まで繋がる学部でありたいということを祈願としてきました。その様な希望から文化学研究科改組の議論に参加したわけですが、一方が客観性と普遍性を追求するのに対し、他方は主体性と継続性を保つということで、相反するものではないにしろどうしてもすれ違いがでてくる様に思われました。これらを如何に上手に止揚し組み立てるかが大きな課題になるのではないのでしょうか。

神戸大学の今後一層の発展と皆様方のご健勝をお祈り申し上げます。本当にありがとうございました。

いわ きき きん 岩 嶋 錦 (発達科学部)

昭和9年3月6日生

(学歴)

昭和31年3月

大阪市立大学家政学部

被服学科卒業

(学位)

昭和54年7月

医学博士(大阪医科大学)

(専攻)

衣環境学

(略歴)

平成3年4月 神戸大学教 授(教育学部)

平成4年10月 “ ” (発達科学部)

平成9年3月 停年退職

《在職6年》

「6年間の思い出」

学舎から見渡せる景観の素晴らしさに、思わず



感嘆の声をあげたのが6年前、教育学部家政科被服学担当として赴任した時でした。

しかし、景色に見とれていたのも束の間、学部改組が始まり、1年半後には発達科学部生活環境論講座で衣環境分野を担当することになりました。

その2年数カ月後には、未曾有の大震災に遭遇し、豊かな環境に甘んじていた日常から、突然、最小限の生活条件を満たすことさえ困難な厳しい状態への変化を目の当たりにしました。これらの経験から、改めて人間生活における衣環境の立場と役割、被服の本質的な意義について考えさせられました。

比較的、短期間であったかもしれませんが、多くのことを経験し、学んだ日々でした。その間、先生、職員の方々には終始優しく、行き届いた対応をして頂きまして、本当に有難い思いで一杯です。深く感謝申し上げます。

いん どう かず お 犬 童 一 男 (法学部)

昭和8年12月1日生

(学歴)

昭和34年3月

九州大学法学部卒業

昭和42年9月

東京大学大学院法学政治

学研究科政治専門課程博

士課程修了

(学位)

昭和42年9月

法学博士(東京大学)

(専攻)

西欧政治史

(略歴)

昭和50年10月 神戸大学教 授(法学部)

昭和56年6月 “ ” 評議員

(昭和58年5月まで)

昭和58年4月 “ ” 法学部夜間学部主事

(昭和59年3月まで)

平成5年4月 “ ” 大学院国際協力研究科教

授兼任

平成9年3月 停年退職

《在職29年6か月》

振り返りますと私は成人してからの半生を神戸大学と阪神で過ごしました。九州で生まれ育ち、関東で研究者・大学人となって神戸大に定着しましたが、こんなに長く同じ所にいたことは他にありません。神戸は大学の環境も良く、灘の酒や土地の食べものにもすっかりなじみました。ずっと単身



赴任の暮らしでしたが、そんなに疎外感なく気楽に暮らし、研究・教育に関わる仕事も割とよく致しました。優はとれなくても良はいただけるでしょう。

六甲台もずい分変わりました。建物や設備の近代化が進み、大学院の新設や改革などがありました。幽霊が出るとの噂があった古い家もなくなり、そこにはモダンな研究棟ができています。在任中おおよそ長なるものに縁なきヒラでしたが、伝統ある水泳部の部長(大学では顧問)となり、14年も務めました。老朽化した六甲台プールの近代化プランもかつてはありましたが、今では発達科学部に全学的プールをつくることになっています。これが、早く実現するよう大学が努力されることを望みます。このプールのことは現役部員やOBの凌泳会の方々との付き合いから私の心に残ります。

阪神大震災は私にとってトラウマとなる出来事でした。何よりも身近な前途ある学生を亡くしたことです。思い出す度に泣けてきます。この震災の衝撃もあって停年2年前から初心に返って研究に取り組み、今年3月までに2本の割りと大きな論文を「神戸法学年報」に発表しました。

大学改革についても言及しておきます。4年前には基礎ゼミと大学院国際協力研究科の比較民主主義論の講義を余分にもつことになり、初め大変だと思いましたが、前者は結構楽しかったし、後者はそのための勉強が私自身にとって有益でした。なお西洋政治史の講義が93年度から1年次主対象になり、後期の金曜日は1限の授業となって4年も続きました。当初、6時起きはしんどいことでしたが、やがて苦になくなりました。健康上これもよきことかなとも思います。老いて知る辛苦の喜びをです。

あい ざわ さだ かず 相 澤 貞 一 (理学部)

昭和9年2月15日生

(学歴)

昭和31年3月

東京大学理学部数学科

卒業

昭和33年3月

東京大学大学院数物系研

究科修士課程修了

(学位)

昭和40年3月

理学博士(東京大学)

(専攻)

非線形偏微分方程式論、非線形関数解析



(略歴)

昭和34年10月 神戸大学助 手(理学部)

昭和37年4月 “ ” 講 師(“ ”)

昭和40年6月 “ ” 助教授(“ ”)

昭和46年2月 “ ” 教 授(“ ”)

昭和51年3月 “ ” 附属図書館理学部分館長

(昭和52年3月まで)

平成元年4月 “ ” 評議員

(平成3年3月まで)

平成9年3月 停年退職

《在職37年6か月》

昭和34年の初夏、東京大学大学院博士課程に在学中であった私は、恩師福原満州雄教授から「佐藤君(故佐藤徳意神戸大学名誉教授)が来ないか」といつてきたが」といわれ、少考の後応諾の返事をお願いした。当時阪神御影にあった御影分校で毎年一月に開催される研究会に参加して、理学部数学科図書室の石炭ストーブを囲んで談笑したことがあり、図書・雑誌が極めて少ないことを知っていたからである。それから37年余を理学部で過ごさせていただきました。停年を迎えるにあたりこの間いろいろとお世話になった諸先生、事務の方々に厚く御礼申し上げます。

着任直後佐藤先生の研究室に呼ばれ、大学教官としての心得について注意を受けた。とくに研究についての注意の中で今でも鮮明に思い出すことは、最後に話された先生の願望である。それは、神戸大学数学教室をミュンスタ大学の数学教室のようにしたいという願望である。ドイツ、ウェストファレン州にあるミュンスタ大学は、1926年頃から多変数解析関数論の研究(わが国では、1936年に始まる岡潔先生の研究が知られている)において、世界的中心地となり、パリ学派と並んで、ミュンスタ学派を形成したが、当時は学位の授与のできない短期大学であったという。先生は研究成果をあげるように私を励まされたのであるが、振り返って、先生の期待に応えられなかったことに忸怩たる思いがあります。

大学院院生諸君とのセミナーは楽しい思い出です。若いころは、土曜日は、午前中は大学でセミナー、午後は六甲山を越えて有馬温泉ヘルスセンターで入浴後ビールというパターンでした。また高松塚古墳の発掘後は、春秋2回飛鳥近辺の万葉の故地を訪れました。今は禁止されている、石舞台古墳の上で休憩をしたことは懐しい思い出です。

最後に、神戸大学の益々の発展と皆様のご健勝、ご多幸を心から祈念いたします。

武 富 由 雄 (医学部)



昭和8年8月14日生
(学歴)
昭和49年3月
近畿大学法学部法律学科
卒業
(学位)
平成6年2月
医学博士(大阪大学)

(専攻)

理学療法学

(略歴)

昭和57年4月 神戸大学医療技術短期大学部教授
平成6年10月 " 教授(医学部)
平成6年10月 " 医療技術短期大学部教授
兼任

平成9年3月 停年退職

《在職15年》

「創設の思い出」

本やスライド・ファイル、資料に埋もれた研究室に居ると、どう整理しようかと思う日がつづいていた。放ってしまえばよいが、なかなか決心がつかない。年が明けて大学を去る日が近づくと、事は意外にスムーズに解決してくれるものである。

昭和55年のある日、私が務めていた大阪大学医学部附属病院リハビリテーション部に一通の手紙が届いた。「神戸大学に医療技術短期大学部を創設する計画がある。ついては準備段階であるので理学療法士養成に関する情報を提供していただきたい」旨の依頼があった。開設準備室に何度か足を運んだ。山を削った友が丘の一隅、1万坪の広い地に医学部附属看護及び臨床検査技師学校の1棟がぽつんと建ってただけで、本当に開学されるのであろうか、と疑った。

昭和56年10月、医療技術短期大学部理学療法学科が開設、転任の命が降り、昭和57年春、六甲台学舎で入試実施、第1期生を迎えることになった。鉄筋の鉄の打撃騒音の中、学舎の建設が授業の開始とともに進められた。カリキュラムの編成、室のデザイン、設置器具・備品の申請、臨床実習施設の獲得など、ハードとソフトの構築がすべてゼロからのスタートであった。創設当初からさらなる医療技術者の高等教育を目指した。短大部創設から13年目、神戸大学と医学部の理解が得られ、念願の医学部保健学科が平成6年10月開設された。大学入試センター試験を終えた直後の平成7年1月17日、不運にも兵庫県南部地震が起きた。前期

入試は阪大、岡大、そして破壊を免れた神大の校舎に教職員は分かれ実施、保健学科の第1期生を迎えることができた。阪神大震災は我々の教育、研究、そして人生に多くの示唆を与えてくれた。

私は短期大学部と保健学科二つの創設の過程に幸運にも身を置くことができ、得難い貴重な経験を持つことができた。今後は大学院開設への歩みを進め、飛躍を遂げられることを祈念申し上げます。終わりに、これまでお世話になりました教職員の皆様に厚くお礼を申し上げます。ありがとうございました。

中 井 久 夫 (医学部)



昭和9年1月16日生
(学歴)
昭和34年3月
京都大学医学部医学科
卒業
(学位)
昭和41年6月
医学博士(京都大学)

(専攻)

精神神経科学

(略歴)

昭和55年6月 神戸大学教授(医学部)
平成9年3月 停年退職
《在職16年10か月》

「退官にあたって」

神戸大学には16年10ヵ月勤務させていただいた。京都、東京、名古屋と遍歴したが、神戸は私が一つの所にいた最長記録であり、今後も更新されることはないだろう。46歳から63歳まで、現役精神科医の正に後半を神戸大学病院の患者を診て過したことになる。

神戸では私は自分の能力以上の仕事をさせてもらったと思っている。また自由に自分の糸を紡ぐことができた。思い残すことはほとんどない。

私は仕事の性質上、独りで考え、1対1で治療する。しかし、目に見えない力に支えられたことは身に染みて有難く思っている。若い人たちが何くれと助けてくれ、また遠慮なく討論してくれた。また「せんせい、それは違います。」とさりりと意見を言ってくれた。大きくは道を誤りたなかったとすれば、その人たちのおかげである。

精神医学のカバーする範囲は広い。脳科学から法精神医学、行政まである。むろん、その中心に臨床というものがあるのだが、若い人

たちの研究を全て理解することなど、私の器量では到底できない。せめて伸びる芽を邪魔しないように努めたつもりであるが、私の独りよがりでなければ幸いである。

在任中に精神科病棟が完成された。陰に陽に実現に努めて下さった、本部、医学部の事務方にも、歴代の学長、学部長、院長にも感謝を捧げる。画期的病棟といわれ、これなくしては対震災精神医学キャンペーンは行えなかったろう。

研究棟の建替のために仕事がしにくかった時期があったが、そのおかげで私は現代ギリシャ語の詩を訳し、本国からも賞めていただいた。宿願のヴァレリー『若きパルク／魅惑』も全訳できた。

各所に散在する古色蒼然とした建物群の中に赴任して、オフ・ホワイトに統一されよくデザインされた楠キャンパスを去ることになる。ふり返ると胸の中で柔らかく溶けて行くものがある。他科の医師、看護、事務の方々はもちろん、精神科特有の難しい電話によく対処して下さった交換手の方々にも一言御礼を言いたい。そして、よく講義を聴いて下さった学生の皆さんにも一。

多 淵 敏 樹 (工学部)



昭和8年7月28日生
(学歴)
昭和31年3月
神戸大学工学部建築学科
卒業
(学位)
昭和58年3月
工学博士(京都大学)

(専攻)

建築史・意匠、建築計画、都市形成論、考古学
(略歴)

昭和31年10月 神戸大学教務職員(工学部)
昭和35年7月 " 助手(")
昭和40年4月 " 助教授(")
昭和58年3月 " 教授(")
平成3年5月 " 学生部長
(平成5年2月まで)
平成5年2月 " 工学部長、工学研究科長、
評議員
(平成6年3月まで)
平成6年4月 " 大学教育研究センター長、
評議員
平成6年6月 " 副学長、大学教育セン
ー長、評議員

平成9年2月 退職

《在職40年5か月》

「神戸大学での45年」

昭和27年4月に本学工学部建築学科に学生として入学して、本年2月15日付けで、副学長の任期が満了するのを期として、学生、職員、教官としての45年の長い神戸大学人としての生活に一応の終りをつけることになった。

その間の大部分は建築史の研究と教育についてやせていただいたが、自由にのびのびと楽しい日々であった。寝殿造の研究に始まって、県下の古社寺や民家の研究、さらに日本の住居の成立過程の研究から、都市景観形成についての研究と先輩同僚や学生達の力添えで、多くの成果を上げることができた。また学際的な分野の発掘調査で、福原京の位置を初めて確認できたことをはじめ考古学との関連でも日本で初めての発見をいくつかすることが出来た。また研究につながる設計として、愛媛松山市の東雲神社社殿や播磨清水寺楼門、地藏堂、摂津多田神社政所殿などの建築を造ることが出来た。またここ数年間は学生部長、工学部長、副学長、大学教育研究センター長を拝命して、大学を異なった立場から見の機会を与えられたことは、私にとって大きな糧となり幸せであった。

最後になったが神戸大学の先生方に対して、その多くの頭脳と研究の蓄積をどうか全学の学生の教育にもふり向けていただくことをお願いして、退官のあいさつとさせていただきます。

西 川 勲 (農学部)



昭和8年5月9日生
(学歴)
昭和31年3月
岐阜大学農学部農芸化学
科卒業
(学位)
昭和60年5月
農学博士(東京大学)

(専攻)

畜産製造学、乳製品学

(略歴)

昭和61年4月 神戸大学教授(農学部)
平成6年4月 " 農学部生物機能化学科長
(平成7年3月まで)
平成9年3月 停年退職
《在職11年》
企業において30年間に渉り研究開発に従事した

後、たまたま専門分野が一致し、教職に携わることになりました。神戸大学における11年間の教育研究は、私にとって大変貴重な経験でありました。講義も最初のうちは緊張し、名講義に酔ってか居眠りをする学生も散見されましたが、回を重ねるにつれて学生諸君の熱気に触発されて調子が出、教壇に立つことが楽しみとなりました。

特に想い出深いことといえば、牛乳を使った鍋料理—飛鳥鍋—を専攻生と共に囲んだことです。この料理は1300年ほど前に僧侶の間で作られた、若どりや季節の野菜を牛乳とだして煮た鍋物で、奈良の橿原市周辺の名物料理といわれるものです。私は幸か不幸か单身生活のお蔭で料理大好き人間であったので、卒業間近の冬季に毎年、腕を振ったものでした。近隣の研究室には香害？で迷惑をおかけしたと思いますが、若者達の本音が聞ける楽しい一時でありました。

予期しなかった大震災の経験は残念なことでしたが、六甲山を背後にして海を臨む素晴らしい自然環境の下で奉職できましたことは本当に幸わせでした。

終りに、これまでお世話になりました教職員の皆様に厚く感謝申し上げますとともに、各界の卒業生の諸氏の御活躍を祈念いたします。

ふじ い きょうし (農学部)



昭和8年9月15日生
(学歴)
昭和32年3月
兵庫農科大学農芸化学科
卒業
(学位)
昭和47年3月
農学博士(名古屋大学)

(専攻)
食品製造化学
(略歴)

昭和34年8月 兵庫農科大学助 手
昭和43年4月 “ 助教授
昭和43年4月 神戸大学 “ (農学部)
昭和61年4月 “ 教授 (“)
平成元年4月 “ 評議員
(平成3年3月まで)
平成元年8月 “ 共同研究開発センター副センター長
(平成2年3月まで)
平成2年4月 “ “

センター長

(平成5年3月まで)

平成5年4月 “ 大学院自然科学研究科長

(平成7年3月まで)

平成8年4月 “ 附属図書館長

(平成9年3月まで)

平成9年3月 停年退職

《在職37年8ヶ月》

37年余の大学生活で私にとって最も印象深いのは、なんといっても1995および96両年度の自然科学研究科長としての生活である。当時、理・工・農3学部が改革が終わり、研究科の改組の気運が盛り上がっていた。自然科学研究科は創立以来10年余を経過して色々な点で見直しが迫られていた。そのなかには内部では解決の不可能な事もあった。例えば、94年度に研究科の兼任教官は225名であったが、予算定員は52-3%に落ちていた。また“学際性”を強調するのあまり、学問的統一性に乏しく、組織だった構成を欠く専攻も見受けられた。

これらを是正し、さらに研究科の発展には拡充改組を行なうとともに、研究科の教育研究の中心となる専任の教官の講座を設置すること、そして当然、その改組は、自然科学研究科の理念に立脚したものとする。というのが基本的な考え方であった。しかしながら、文部省の壁は非常に厚く、実現はなかなかむづかしいといわれていた。

ところが、2月末から3月はじめにかけて事態は一変した。文部省は理・工・農の3研究科をそれぞれの学部から切り離し、自然科学研究科に統合するならば博士課程の拡充改組に必ずやというのである。それからは、改組実現へ向けての努力が始まった。理、工、農3学部長それに就任前ながら私および3学部から各2人の教授で改組計画委員会を組織し、多くの教官の協力を仰いで、8専攻からなる博士後期課程、それに16専攻からなる前期課程を持つ区分性大学院“総合自然科学研究科”構想が纏った。4月下旬のことである。それからは、文部省との折衝がはじまった。何度も注文を付けられて、委員会で対応について議論し、もう改組は諦めかけたこともあったが、結局後期課程は1専攻増、8専任(小)講座、前期課程は15専攻からなる現在のような姿に落ち着いた。

前期課程にも自然科学研究科の総合性、学際性の理念はそれを具現すべく規則やカリキュラムに盛り込まれた。空文にせぬ努力が必要であろう。

交渉の過程で前期課程を含めた全面改組は、改革の第2バージョンで、という係官の言葉が印象

に残った。文部省は全国の自然科学研究科の改革を本気で考えているなど感じたことである。

総合自然科学研究科の“総合”が削られた。その理由は自然科学研究科は総合性、学際性を特徴とした大学院であり、ことさら“総合”をうたう必要はないというのが文部省の主張であった。また、当時議論の対象となった学部からの積み上げの一般研究科への移行も無理な事も判明した。

本研究科の研究科長は教育公務員特例法施行令に規定される部局長となった。研究科のステータスが上がったということであろう。

私の在任期間はおかげで拡充改組とその具体化、規則等の整備に、ついで実現しなかった第2次改組計画に明け暮れた。改革について議論をたたかわしたのが懐かしい。当時の位田理学部長、多淵工学部長、尾崎農学部長をはじめ多くの先生方にご指導ご鞭撻を賜った。そして事務当局にも大変お世話になった。この場をお借りして深甚の謝意を表したい。

いま、研究科では当時果たし得なかった改革の第2バージョンが進んでいる。立派な自然科学研究科として発展していくことを心からお祈りするものである。

えの もと きょうし と (内海地域機能教育研究センター)
榎 本 幸 人 昭和8年12月7日生



(学歴)
昭和32年3月
北海道大学理学部
生物学科卒業
(学位)
昭和48年9月
理学博士(北海道大学)

(専攻)
系統学、藻類学、植物地理
(略歴)

昭和38年5月 神戸大学助 手(理学部)
昭和42年12月 “ 理学部附属臨海実験所
助 手
昭和47年5月 “ “
講 師
昭和53年2月 “ “
助教授
昭和62年8月 “ “
教 授
平成7年4月 “ 内海地域機能教育研究センター教授

平成9年3月 停年退職

《在職33年1か月》

「神戸大学追想」

私が神戸大学に着任したのは昭和38年5月であった。当時、理学部は阪神御影駅近くに所在し、移転計画のため一部は既に神戸市立御影工業高校が使用していた。翌年理学部は六甲に移転した。私は理学部生物学科勤務と同時に、当時学内措置として設置されたばかりの理学部附属臨海実験所も担当していた。実験所は初代所長の理学部生物学科系統学講座の故広瀬弘幸教授の尽力により淡路島の淡路町から神戸大学が土地・建物の寄贈を受け転用したものである。建物は明治末年、伝染病の隔離病棟として建てられ、その後、衛生環境の改善とともに本来の使用目的を失い、長い間放置された状態にあった。これに神戸大学が改修を加え、実験所として出発したもので木造平屋瓦葺きであった。特別の予算措置もなく系統学講座の乏しい予算を裂いての四苦八苦の運営であった。42年官制が布かれ、教官1名、技官1名が配置され私は実験所の専任教官となった。予算措置がなされたものの運営は相変わらず厳しく僅かばかりの研究費も大半は運営費の一部となって消滅した。発足時から臨海実験所の存在意義の理解が得られず、物心両面、苦難の時が流れた。大学全体が予算的に苦しい環境にあり、他をかえり見るほどの余裕もない時代であった。しかし、この時代、多くの卒業生がこの実験所を勉学の間とし巣立っていった。58年度に老朽化した建物の全面的な増改築が行なわれ経常費の増額をみた。62年教授(振替)、助手(学内措置)の配置があり、教授に就任した。時あたかも臨海実験所の改革の問題が投げかけられ学部内に検討会を置き組織改革の方向を探った。平成7年4月、関係部局の理解のもと、学内共同利用施設として神戸大学内海地域機能教育研究センターに改組され、2研究分野、教授2名、助教授2名、助手1名、技官2名の配置があり、新たなる活動が始まった。振り返れば、臨海実験所の創設期から現センターの創設期まで施設とともに歩んだ三十余年の在任であった。新たなる施設の道床を築いたのみで、若きスタッフに未来を託し、去ることとなる。感無量である。

なが い 井 勇 (保健管理センター)



昭和8年10月24日生
(学歴)
昭和33年3月 神戸医科大学医学部
医学科卒業
昭和38年3月 大学院修了
(学位)
昭和38年3月 医学博士(神戸医科大学)

(専攻)

内分泌学

(略歴)

昭和42年6月 神戸大学助 手(医学部附属病院)
昭和48年5月 " 講 師(")
昭和52年7月 " 保健管理センター講 師
昭和55年4月 " " 助教授
昭和58年4月 " " 教 授
昭和58年4月 " " 所 長
平成9年3月 停年退職

《在職29年10か月》

私が保健管理センターを担当させていただくようになったのは昭和58年ですから今年で14年目になります。

この間私が最も力を注いで来ましたことは、学内及び学外に於いて保健管理センターに対する理解を深め、その地位を向上させることでありました。それは京大井村総長が述べられましたように「かつては、保健管理というのは医学者のする仕事ではないという認識をあらためる」ことであります。その方策として私は、まず全国大学保健管理研究集会に毎年3題以上の研究発表を提出すること、及びこれとは別に専門領域の研究を内外の学会で報告することにつとめてきました。センター所属の医師が少ないため、この2つの目的を実現することはきわめて困難でありましたが、医学部第三内科千原教授及び神戸商科大学川口教授の御支援、御協力を得て、やっと国際学会にacceptされるような研究をセンター内で作ることが出来るようになりました。

この間、歴代学長及び西塚現学長から、センターに対して暖かいご支援を賜りました。このことに私は衷心より御礼を申し述べたいと思います。お陰をもちまして平成4年には大学院医学研究科に病態情報講座を開設することができ、現在では1名の大学院生と2名の研究生が所属しております。

す。

このように本学保健管理センターは、センター業務に於ける「保健管理」と「研究」という2つのテーマを両立して具体化する方向に進んで来ましたが、センターは他の学部所属の講座とは異なり全学の御支援によって成り立っている施設であります。今後センターが更に発展していくためには、神戸大学全体の御協力を得なければなりません。何卒御理解のある御支援を賜りますようお願い申し上げる次第です。

◇新役員紹介

(2月16日発令)

※副学長



教授 神木 哲男
(昭和9年10月12日生)

(学歴)

昭和34年3月 神戸大学経済学部卒業
昭和36年3月 " 大学院経済学研究科修士課程修了

(学位)

昭和57年5月 経済学博士(神戸大学)

(専攻)

日本経済史

(職歴)

昭和36年4月 神戸大学助 手(経済学部)
昭和39年4月 " 講 師(")
昭和42年4月 " 助教授(")
昭和53年4月 " 教 授(")
昭和58年4月 " 経済学部夜間学部主事
(昭和59年3月31日まで)

昭和58年6月 " 評議員
(昭和60年5月31日まで)

平成6年11月 " 経済学部長
(平成8年11月15日まで)

平成9年2月 " 副学長
(平成10年3月31日まで)

※副学長



教授 片岡 邦夫
(昭和15年3月27日生)

(学歴)

昭和38年3月 京都大学工学部卒業
昭和45年7月 " 大学院工学研究科博士課程修了

(学位)

昭和45年7月 工学博士(京都大学)

(専攻)

移動現象学、伝熱・エネルギー工学

(職歴)

昭和43年4月 神戸大学講 師(工学部)
昭和46年5月 " 助教授(")
昭和63年10月 " 教 授(")
平成5年6月 " 評議員

(平成6年3月31日まで)

平成6年4月 " 工学部長
(平成9年2月15日まで)

平成8年5月 " 都市安全研究センター長
(平成10年3月31日まで)

平成9年2月 " 副学長
(平成11年2月15日まで)

※大学教育研究センター長



教授 瀧上 凱令
(昭和17年2月3日生)

(学歴)

昭和40年3月 大阪大学文学部卒業
昭和42年3月 " 大学院文学研究科修士課程修了

(専攻)

実験心理学、非言語コミュニケーション

(職歴)

昭和42年10月 神戸大学助 手(教育学部)

昭和48年4月 " 講 師(教養部)
昭和51年4月 " 助教授(")
昭和62年4月 " 教 授(")
平成4年10月 " " (国際文化学部)
平成5年6月 " 国際文化学部コミュニケーション学科長
(平成6年9月30日まで)
平成6年10月 " 評議員
(平成8年9月30日まで)
平成9年2月 " 大学教育研究センター長
(平成11年2月15日まで)

※工学部長



教授 北村 新三
(昭和15年5月31日生)

(学歴)

昭和38年3月 神戸大学工学部卒業
昭和41年3月 " 大学院工学研究科修士課程修了

(学位)

工学博士(大阪大学)

(専攻)

計測制御工学、生体情報処理

(職歴)

昭和41年4月 大阪大学助 手(工学部)
昭和48年4月 神戸大学助教授(")
昭和60年4月 " 教 授(")
平成5年6月 " 評議員
平成7年4月 " 大学院自然科学研究科長
平成9年2月 " 工学部長
(平成10年3月31日まで)

※大学院自然科学研究科長



教授 佐々木 武
(昭和19年4月3日生)

(学歴)

昭和42年3月 東京大学理学部卒業

昭和44年3月 " 大学院理学系研究科修士課程修了

(学位)

理学博士(名古屋大学)

(専攻)

幾何学

(職歴)

昭和44年4月 名古屋大学助 手(理学部)

昭和54年10月 熊本大学助教授(")

平成元年4月 広島大学 " (総合科学部)

平成2年4月 神戸大学教 授(理学部)

平成7年4月 " 評議員

平成9年2月 " 大学院自然科学研究科長
(平成11年2月15日まで)

◇第32回全国文献・情報センター長会議の開催

本学経済経営研究所附属経営分析文献センターを当番校として、2月14日、第32回全国文献・情報センター長会議を開催しました。

文部省学術国際局学術情報課の担当官、外国法文献センター(東大)・日本経済統計情報センター(一橋大)・東洋学文献センター(京大・東大)のセンター長他関係教官、各センター関係の事務長等が出席、事業報告を行い、各センターの抱える諸問題について討議しました。

学術情報課からは、『平成9年度学術情報システム関係予算(案)の概要』についての説明の他、質疑応答に対する指導助言がありました。当会議は、毎年1回開催されており、平成9年度は一橋大学で開催されます。



—経済経営研究所—

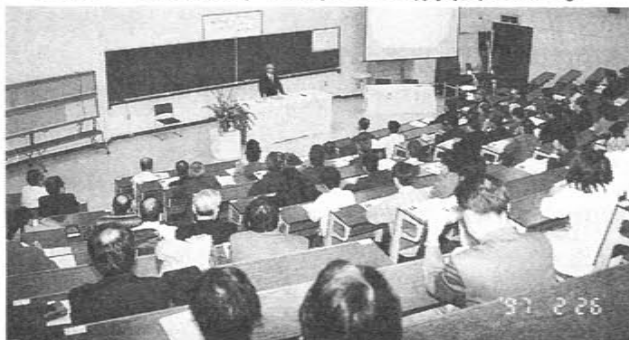
◇第11回神戸大学医学部学術講演会の開催

第11回神戸大学医学部学術講演会を、2月26日(水)午後4時から医学部第5講堂において、講演者に(財)半導体研究振興会半導体研究所所長・

前東北大学総長・文化勲章授章者 西澤 潤一博士をお迎えし、「21世紀の科学技術と日本のゆくえ」をテーマに行いました。

当日は医学部教職員・学生はもとより、他学部・他大学教職員・一般市民等約200名が参加し、西澤先生のご体験と学識を通じて、貴重なご高説を拝聴し、参加者一同、深い感銘を受けました。

講演の終わりには質疑も行われ、先生にサインを頂く一幕もあり、熱気溢れる講演会でした。



—医学部—

人 事

◇異動

所属部局 官 職	氏 名	発令 月日	異 動 内 容 (異動前の所属官職)
附属図書館 (情報管理課)	宮 崎 明 子	2.28	辞職(事務補佐員)
文 学 部	小 林 久 子	2.28	辞職(助手)
発達科学部	平 山 洋 介	2.16	昇任(助手)
医 学 部	牧 野 邦 彦	3.1	昇任(附属病院講師)
"	井 上 芳 光	"	昇任(助手)
助 手	石 田 春 彦	"	配置換(附属病院助手)
"	吉 田 茂 樹	"	転任(国立神戸病院医師)
医 学 部 附 属 病 院	毛 利 光 宏	3.1	昇任(医学部助手)
"	山 辺 晋 吾	"	" (")
"	木 西 實	"	配置換(医学部講師)
(薬剤部)	米 谷 浩 明	2.28	辞職(薬剤師)
薬 剤 師	喜 多 知 子	3.1	復帰(育児休業)
(看護部)	実 近 裕 子	2.3	育児休業(看護婦)
(中央検査部)	増 田 由 佳 子	2.21	育児休業(臨床検査技師)
臨床検査技師	河 本 智 子	"	臨時的任用
工 学 部	多 淵 敏 樹	2.15	辞職(教授)
助 手	埴 淵 都 紀 子	3.1	採用
農 学 部 附 属 農 場			
文 部 技 官	岸 本 邦 義	3.1	復職

◇各種委員会委員の異動

委員会名 所属部局	職 名	氏 名	命・免 の 別	任 期 (発令日)
広報委員会				
医 学 部	教 授	龍 野 嘉 昭	命	H.9.2.1~ H.10.3.31
"	"	松 村 武 男	免	

◇研修

*平成8年度史料管理学会(通算第42回)

期 間 平成8年11月11日~11月22日

会 場 ホテル信濃路

主 催 文部省大学共同利用機関 国文学研究資料館史料館

参加者

附属図書館情報管理課情報第二掛員

篠栗 伸一

*平成8年度神戸大学技術官研修

期 間 全体研修 平成8年8月21日

班別研修

理工医系班 平成8年8月22日・23日

農学系班 平成9年2月20日・21日

会 場 農学部C101号教室他

主 催 神戸大学

参加者

[理工医系班]

理学部 技術官

西中満寿子

" "

三軒 一義

" "

牛原 康博

医学部 "

小野寺紀代子

" "

薛 富義

" "

谷岡 慎市

" "

松本 修一

" 技術官補

岩本 泉

" 技術官

鉢田 和代

" "

澤山 俊子

" "

矢田加奈子

" "

本多 雅子

" "

山口 禎子

" "

井上 秀雄

" "

田村 敏昌

工学部 "

木山 正典

" "

榎谷 正夫

" "

小林 秀惠

" "

西野 孝仁

" "

中西 伸介

" "

前田 浩之

工学部	技術官	伊地知武吉
"	"	北山 良和
"	"	原田 和男
"	"	土居原知良
"	"	山中 和彦
"	"	米森 秀登
"	"	福井喜一郎
"	"	中崎 千善
"	"	杉本 勝美
"	教務職員	横田久美子
"	技術官補	岡田 崇仁
"	技術官	日和 千秋
"	"	道脇 昭
"	教務職員	鈴木登代子
"	技術官	吉村 徳夫
"	"	野村 憲司
"	教務職員	小柴 康子
"	技術官	曾谷 知弘
"	"	香嶋 伸一
"	"	藤井 勝宏
"	"	菊田 望
"	"	近藤 敦
"	"	大西 和夫
"	教務職員	和氣 大知
"	"	吉田 秀樹
"	技術官	高濱 邦高
"	"	山田 昌利
"	技術官補	義澤 康男
"	技術官	市成 準一
大学教育研究センター教務職員		木村 文明
"	"	中崎 和美
"	"	安積 和子
[農学系班]		
発達科学部技術官		山口平八郎
農学部附属農場	"	吉田 重喜
"	"	小林 桂
"	"	丸山 正晴
"	"	三宅 幹雄
"	"	山下 孝男
"	"	山本 昭
"	"	久下 志朗
"	"	寛 重文
"	"	橋爪 浩和
"	技術官補	富士松雅樹
"	"	正木健太郎



◇海外渡航

所 属	職 名	氏 名	渡 航 先	渡 航 目 的	渡航期間	備 考
国際文化 学 部	助教授	加藤 雅之	オーストラリア ニュージーランド	短期留学生等受入れ推進方策について調査研究のため	9. 2. 2 ~ 9. 2. 9	出 張
"	"	中 野 聡	アメリカ	フィリピン系コミュニティの調査研究	9. 2.20 ~ 9. 3. 8	"
"	外国人 教 師	フレモント・ バーンズ, グレゴリー	イギリス	米欧外交史及び英語教育の研究及び資料収集のため	9. 2. 8 ~ 9. 3.31	研 修
発達科学部	助教授	城 仁士	アメリカ	災害ストレスに関する研究	9. 2. 1 ~ 9.11.30	出 張
"	"	高橋 正	"	インターネット環境下における数理科学教育の研究	9. 2. 1 ~ 9. 3.31	"
法 学 部	教 授	小室 程夫	ベルギー イギリス	WCO原産地規則技術委員会出席及び国際経済法に関する資料収集のため	9. 2. 9 ~ 9. 3. 2	"
"	"	阿部 泰隆	フランス, ドイツ イギリス, イタリア	自然災害の被災者に対する支援制度の比較法的研究	9. 2. 2 ~ 9. 2.13	研 修
"	"	五百旗頭眞	香港 中国	香港返還及び台湾問題に関する調査を行うため	9. 2.26 ~ 9. 3. 2	"
経営学部	"	加護野忠男	"	日韓組織学会出席のため	9. 2. 2 ~ 9. 2. 5	出 張
"	"	金井 壽宏	韓国	日韓組織学会に出席し研究発表	9. 2. 2 ~ 9. 2. 5	"
"	"	田村 正紀	中国	中国の物流施設を始めとする流通システム基盤の資料収集とヒアリングおよび上海財経大学との共同研究プロジェクトの打ち合せ	9. 2.22 ~ 9. 3. 2	研 修
理 学 部	"	中西 康剛	韓国	第5回結び目, 絡み目に関する韓日セミナーに出席, 講演並びに結び目理論に関する研究のため	9. 2.17 ~ 9. 2.21	出 張
"	助教授	川越 清以	スイス	国際協同実験電子・陽電子衝突実験	9. 2.23 ~ 9. 3.26	"
"	助 手	小笹 隆司	チリ	5th CTIO/ESO workshop "SN 1987A: Ten Years After" 出席, 発表のため	9. 2.21 ~ 9. 3. 3	研 修
医 学 部	助教授	谷川原祐介	スイス フランス	Population Conference出席及び臨床薬理学に関する研究交換	9. 2. 6 ~ 9. 2.16	出 張
"	"	黒坂 昌弘	アメリカ	第43回アメリカ整形外科基礎学会及び第64回アメリカ整形外科学会出席並びに半月板縫術に関する研究交換	9. 2. 8 ~ 9. 2.20	"
"	"	平田 総一郎	"	第43回アメリカ整形外科基礎学会出席	9. 2. 8 ~ 9. 2.14	"
"	"	佐浦 隆一	"	"	9. 2. 8 ~ 9. 2.14	"
"	教 授	松尾 雅文	インドネシア	熱帯地域における周産期医学研究	9. 2.13 ~ 9. 2.19	出 張

医 学 部	助教授	西尾 久英	インドネシア	熱帯地域における周産期医学研究	9. 2.13 ～ 9. 2.19	出 張
〃	〃	片岡 陳正	〃	大型共同研究（熱帯地域における感染症）	9. 2.13 ～ 9. 2.22	〃
〃	教 授	龍野 嘉紹	アメリカ	第49回アメリカ合衆国法科学会総会出席及び法科学に関する研究交換	9. 2.15 ～ 9. 2.24	〃
〃	助教授	船原 芳範	インドネシア	熱帯地域における非伝染性疾患実施	9. 2.19 ～ 9. 2.24	〃
〃	教 授	川端 真人	〃	JSPSアジアにおける熱帯病に関する国際シンポジウム出席及び大型共同研究打合せ	9. 2.23 ～ 9. 2.26	〃
〃	〃	堀田 博	〃	アジア熱帯病共同セミナー出席	9. 2.23 ～ 9. 2.26	〃
〃	助教授	宇賀 昭二	イギリス ドイツ スイス	ヨーロッパにおける水道水のクリプトスポリジウム汚染防止対策の視察・研究打合せのため	9. 2. 9 ～ 9. 2.21	研 修
〃	助 手	橋本 靖	アメリカ	第43回アメリカ整形外科基礎学会及び第64回アメリカ整形外科学会出席	9. 2. 9 ～ 9. 2.18	〃
〃	教 授	尾原 秀史	台湾	第9回西太平洋救急救命学会出席及び麻酔学に関する研究交換	9. 2.19 ～ 9. 2.23	〃
〃	助 手	志賀 真	〃	〃	〃	〃
工 学 部	〃	樋野 励	アメリカ	HMS5 国際会議に出席し、研究資料収集を行う	9. 2.11 ～ 9. 2.19	出 張
〃	教 授	櫻井 春輔	シンガポール	地盤工学に関する資料収集を行う	9. 2.20 ～ 9. 2.23	研 修
農 学 部	庶 務 掛 員	中田志保美	アメリカ	ワシントン大学の国際交流事業視察及び国際交流事業促進に係る意見交換	9. 2.23 ～ 9. 3.13	出 張
〃	文部教官 助 手	小林 伸哉	タイ	タイ国における伝統的稲作に関する調査	9. 2.11 ～ 9. 3.11	研 修
国際協力 研究 科	教 授	片山 裕	フィリピン	文部省国際学術研究「東南アジア島嶼部民族における政治文化と社会統合の社会人類学研究」のための実態調査	9. 2. 9 ～ 9. 2.23	出 張
〃	〃	西澤 信善	ミャンマー	ミャンマーの市場経済化に関する調査を行うため	9. 2. 9 ～ 9. 2.24	研 修
経済経営 研 究 所	助教授	梶原 晃	アメリカ	国際会計ワークショップへの出席及び研究交換	9. 2.17 ～ 9. 3. 1	出 張
〃	教 授	井川 一宏	〃	APECの研究についての成果報告に関する打合せのため	9. 2.21 ～ 9. 2.25	〃
〃	助教授	延岡健太郎	韓国	組織学会（Second Japan-Korea Joint Symposium on Organization Studies）へ参加	9. 2. 2 ～ 9. 2. 5	研 修

バイオシ グナル研 究セン ター	助 手	原 賢太	アメリカ	細胞内情報伝達因子群の相互調節機構に関する共同研究の遂行と情報交換	9. 2.12 ～ 9. 3.29	出 張
機器分析 セン ター	助教授	池田 裕二	〃	国際会議出席及びレーザー計測に関する資料収集のため	9. 2.21 ～ 9. 3. 2	〃
留 学 生 セン ター	〃	中西 泰洋	オーストラリア ニュージーランド	短期留学生等受入れ推進方策についての調査	9. 2. 2 ～ 9. 2. 9	〃
事 務 局	施 設 部 長	高須賀道治	〃	〃	〃	〃
〃	留学生 課 長	坪内 陽典	〃	〃	〃	〃
〃	人事課 給与掛 主 任	新居 昌明	アメリカ	ワシントン大学の国際交流事業視察及び国際交流事業促進に係る意見交換	9. 2.23 ～ 9. 3.13	〃
〃	学生課 総務掛 主 任	北村 浩司	〃	〃	〃	〃



◇平成9年度文部省在外研究員派遣予定者の決定

種類	所 属	氏 名	派遣期間	調査研究機関	調 査 研 究 題 目
長 期 （ 甲 ）	法 学 部	磯村 保	10月	ボワティエ大学（フランス）	フランス契約法理論の研究－日本法、ドイツ法との比較法的考察
	経 済 学 部	三谷直紀	〃	オルレアン大学（フランス）	賃金・雇用システムの国際比較に関する研究
	理 学 部	山口 覚	〃	オーストラリア国立大学（オーストラリア）	地殻の電気伝導度構造の研究
	医 学 部	米田 稔彦	〃	オレゴン大学（アメリカ合衆国）	姿勢制御に関する研究
	〃	吉田 公久	12月	ロックフェラー大学（アメリカ合衆国）	細胞内情報伝達機構に関する研究
	工 学 部	西山 覚	10月	レディング大学（連合王国）	Sn合金触媒の触媒作用に関する研究
	自然科学研究科	東 哲 司	12月	ミシガン州立大学（アメリカ合衆国）	浮稲の深水ストレスに対する適応機構の解明
	国際協力研究科	都 丸 潤子	〃	オックスフォード大学（連合王国）	戦後英国の対東南アジア地域政策と日本の役割に関する調査研究
短 期	文 学 部	岩崎 信彦	2月	オックスフォード大学（連合王国）	変動期における比較社会研究
	発 達 科 学 部	鈴木 幹雄	〃	ハンブルグ大学（ドイツ）	ドイツにおける芸術教育学の成立過程とその現代的展開について
	医 学 部	村田 恵子	〃	ポートランド大学（アメリカ合衆国）	慢性病を抱える家族の適応様式とケアシステムに関する研究
	農 学 部	畑 武志	〃	ブリストル大学（連合王国）	河川流域降雨流出機構のモデル化による水環境保全に関する研究
	自然科学研究科	福田 秀 樹	〃	マンチェスター工科大学（連合王国）	バイオリアクターシステムに関する研究
	国際協力研究科	香 川 孝三	〃	メルボルン大学（オーストラリア）	オセアニア型労働協約法制に関する研究

◇平成9年度国際シンポジウムの決定

シンポジウムのテーマ	開催期間	開催責任者
相互依存を深める世界経済とその政策調整問題	9.6.12～9.6.13	経済経営研究所 教授 阿部 茂行
第2回神戸シンポジウム「21世紀アジアにおける農業、食料と環境を考える」	9.11.12～9.11.14	農学部 教授 堀尾 尚志

◇平成9年度国際研究集会派遣研究員の決定（第Ⅰ期）

所属・職名 氏名	研究集会名	開催地	開催期間
文学部 教授 柴谷 方良	第16回国際言語学会議	パリ（フランス）	9.7.20～ 9.7.25
経済経営研究所 教授 片山 誠一	最適制御、動学ゲームと非線型動学に関する 第6回ウィーン会議	ウィーン （オーストリア）	9.5.20～ 9.5.24

◇平成9年度日本学術振興会外国人招へい研究者の採用

氏名・国籍	所属機関・職	研究課題	受入研究者	種別
Mary Jane MOSSMAN カナダ	ヨーク大学オズグッドホ ールロースクール 教授	司法へのアクセスと弁護士 —性別の問題に着目して—	法 学 部 教 授 樫 村 志 郎	短期
Marko ZGONIK スロベニア	リュブリアナ大学 教授	フォトリフラクティブ結晶の特 性評価に関する研究	工 学 部 教 授 峯 本 工	〃
Mendel KLEINER スウェーデン	シャルマー工科大学 教授	室内音響設計のための多チャ ネル可聴化システムの実現に向けて	工 学 部 教 授 森 本 政 之	〃
Michael Scott TAYLOR カナダ	ブリティッシュ・コロ ンビア大学 准教授	国際貿易と資源・環境政策に関 する研究	経済経営研究所 教 授 片 山 誠 一	〃
Jacek Bogden KRAWCZYK ニュージーランド	ヴィクトリア大学 リーダー	動学ゲームとその経済分析への 応用	経済経営研究所 教 授 下 村 和 雄	〃

◇平成9年度日本学術振興会外国人特別研究員の採用

氏名・国籍	所属機関・職	研究課題	受入研究者	種別
Hai Rong SHANG 中国	北京大学 学 生	励起分子の構造とダイナミッ クス	理 学 部 教 授 加 藤 肇	長期
Sina SARETH フランス	セントアンドリュース 大学 学 生	高圧NMRによる蛋白質の構造及 び熱力学的安定性に関する研究	理 学 部 教 授 赤 坂 一 之	〃
Ulf Peter SVENSSON スウェーデン	シャルマー工科大学 助 手	音響振動連成問題への等価音源 法の応用	工 学 部 教 授 森 本 政 之	〃
Alireza NADERIAN イラン	クイーンズランド大学 研究助手	改築時におけるトンネルの力学 的挙動に関する研究	工 学 部 教 授 桜 井 春 輔	〃

◇平成9年度日本学術振興会特定国派遣研究者の内定

所属・職・氏名	研究課題	派遣国
文学部 教授 北原 淳	タイ農村変動に関する研究	タイ
発達科学部 教授 森井 俊行	核子のスピン構造と高エネルギー反応	インド

◇平成9年度日本学術振興会国際研究集会の内定

所属・職・氏名	集会名	期 間	場 所
理学部 教授 向井 正	惑星間塵雲の科学	9.9.1～9.9.3	神戸大学滝川記念 学術交流会館

◇平成10年度日本学術振興会各種事業の募集のお知らせ

このたび日本学術振興会から、「平成10年度日本学術振興会各種事業の募集について」の案内がありましたのでお知らせします。

なお、手続きその他詳細は、部局の担当掛又は、国際交流課国際学術掛（内線2092）に照会して下さい。

1. 若手研究者養成

事業名	対象分野	採用予定 人数	実施期間	申請受付期間
特別研究員	人文・社会科学及び自然科学	約1,390名	10年4月1日から	9年6月19日～30日
海外特別研究員	人文・社会科学及び自然科学	約65名	10年4月～11年2月の 間に出発 2年間	9年5月15日～23日

2. 共同研究

事業名	対象分野	採用予定 人数	実施期間	申請受付期間
日米科学共同研究	自然科学及び社会科学	約20件	10年4月～11年3月の 間に開始, 1～3年	9年5月15日～23日
日仏科学共同研究Ⅰ	人文・社会科学及び自然科学	1～2件	9年4月～12月の間に 開始, 2年以内	9年9月16日～25日
日仏科学共同研究Ⅱ	生物医学(Biomedical Sciences)	2～3件	10年4月1日～ 12年3月31日	9年9月16日～25日
日独科学共同研究	人文・社会科学及び自然科学	約6件	10年4月～11年3月の 間に開始, 2年以内	9年9月16日～25日
		約6件	10年10月～11年9月の 間に開始, 2年以内	10年3月16日～25日
日英科学共同研究	自然科学（臨床医学を除く。） 及び人文・社会科学	約10件	10年4月～11年3月の 間に開始, 2年度以内	9年9月16日～25日
日韓科学共同研究	自然科学及び人文・社会科学	約20件	10年7月～11年3月の 間に開始, 2年以内	9年10月（予定）
日中科学共同研究	自然科学	約5件	10年4月～10年12月の 間に開始, 3年間	9年7月（予定）

注1）上記の事業はすべて相手国対応機関を有しており、相手国研究代表者もその対応機関に申請書を提出する必要がありますので、ご留意下さい。

注2）日韓科学共同研究と日中科学共同研究の詳細については、後日配布の募集要項を参照して下さい。

3. 研究集会

事業名	対象分野	採用予定 人数	実施期間・場所	対応機関		申請受付期間
				有	無	
*日米科学セミナー	自然科学及び社会科学	約15件	10年4月～11年3月 の間, 日本又は米国	○		9年5月15日～ 23日
*日仏科学セミナー	人文・社会科学及び自然 科学	約2件	10年4月～11年3月 の間, 日本又は仏国	○		9年9月16日～ 25日
*日独科学セミナー	人文・社会科学及び自然 科学	約3件	10年4月～11年3月 の間, 日本又はドイツ	○		9年9月16日～ 25日
		約3件	10年10月～11年9月 の間, 日本又はドイツ			10年3月16日～ 25日
*日韓科学セミナー	自然科学及び人文・社会 科学	約10件	10年7月～11年3月 の間, 日本又は韓国	○		9年10月(予定)
*日中科学セミナー	自然科学	約4件	10年4月～11年3月 の間, 日本又は中国	○		9年7月(予定)
国際研究集会	人文・社会科学及び自然 科学	17件	10年4月～11年3月 の間, 日本		○	9年5月15日～ 23日

注1）*を付したセミナーについては、相手国責任者も相手国対応機関に申請書を提出する必要がありますので、ご留意下さい。

注2）日韓科学セミナーと日中科学セミナーの詳細については、後日配布の募集要項を参照して下さい。

4. 外国人研究者招へい

事業名	対象分野	採用予定人数	実施期間	申請受付期間
外国人招へい研究者 (短期) (平成9・10年度)	人文・社会科学及び自然科学	50名	9年10月～10年3月の 間に来日, 14～60日間	(9年3次) 9年5月15日～23日
		280名	10年4月～11年3月の 間に来日, 14～60日間	(1次)9年9月16日～25日 (2次)10年5月15日～25日
外国人招へい研究者 (長期)	人文・社会科学及び自然科学	35名	10年4月～11年3月の間 に来日, 6～10か月間	9年9月16日～25日
外国人特別研究員	人文・社会科学及び自然科学	120名	10年4月～11年3月の間 に来日, 2年間	(1次)9年9月16日～25日 (2次)10年5月15日～25日
米国・短期特別研究員 (平成9・10年度)	人文・社会科学及び自然科学	25名	9年10月～10年3月の間 に来日, 3～12か月未満	9年5月15日～23日
		25名	10年4月～11年3月の間 に来日, 3～12か月未満	(1次)9年9月16日～25日 (2次)10年5月15日～25日
日独研究者特別招へい (平成10・11年)	人文・社会科学及び自然科学	約3名	10年4月～12年3月の間 に来日, 4～10か月間	9年9月16日～25日
NIS(旧ソ連)諸国研究者 交流事業招へい研究者 (平成9年度)	人文・社会科学及び自然科学	短期約9名 長期約5名	9年11月～10年3月の間 に来日, 短期14～60日間 長期6～10か月間	9年5月15日～23日

5. 研究者派遣

事業名	対象分野	採用予定人数	実施期間	申請受付期間
特定国派遣研究者	国により異なる	下記参照	10年4月～11年3月の間	9年5月15日～23日
海外研究連絡センター	当該地域にかかわる人文・ 社会科学及び自然科学	ナイロビ 2名 カイロ 1名 サンパウロ 1名	10年4月～11年3月の間	9年6月2日～30日
NIS(旧ソ連)諸国研究者 交流事業派遣研究者 (平成9年度)	人文・社会科学及び自然科学	短期約5名 長期約2名	9年11月～10年3月の間 に出発, 短期14～60日間 長期6～10か月間	9年5月15日～23日

特定国派遣研究者の対象国と採用予定概数

バングラデシュ (2)	タイ (15)	フランス (6)	スウェーデン (5)
中国 (29)	ベトナム (6)	ドイツ (8)	スイス (6)
インド (9)	オーストラリア (8)	ハンガリー (5)	英国 (16)
インドネシア (15)	オーストリア (9)	イタリア (6)	アルゼンチン (2)
イスラエル (3)	ベルギー (4)	オランダ (5)	ブラジル (7)
韓国 (13)	ブルガリア (5)	ポーランド (5)	カナダ (8)
マレーシア (7)	チェコ (3)	ルーマニア (5)	チリ (5)
フィリピン (7)	デンマーク (6)	スロバキア (3)	メキシコ (4)
シンガポール (17)	フィンランド (4)	スロベニア (4)	

(備考) 採用予定数は対応機関との協議により変更することがある。

(注) スロベニア, チリについては, 9年11月～10年3月の間に渡航を希望するものの申請も同時に受け付ける。

6. 外国人論博研究者支援

事業名	対象分野	採用予定人数	実施期間	申請受付期間
論文博士号取得希望者に対する支援事業	人文・社会科学及び自然科学	約20名	10年4月1日から	9年10月1日～31日

注) 国内募集対象国: インドネシア, マレーシア, フィリピン, シンガポール及びタイ

掲 示 板

◇日 誌

(平成9年2月)

2月1日(土) 学生部・体育会共催リーダースト

レーニング

3日(月) 補導協議会

13日(木) 部局長会議

入学試験委員会

20日(木) 評議会

25日(火) 個別学力検査(前期日程)

26日(水) " (実技試験)

27日(木) 事務連絡会議

◇訂 正

学報 No.	頁	誤	正
484	611	理学部 助 手 園 田 英 徳	理学部 助教授 園 田 英 徳



神戸大学100年史編集室だより

— 歴史のひとこま —

前身校の歴史—神戸高等商業学校における

課外活動について（その32）—

昭和3年という年は、神戸高商乗馬倶楽部にとって記念すべき年であった。同年4月より、同倶楽部は学友会の正式なメンバーとして承認され、神戸高商馬術部となり、8月には既述のように当時としては最新の設備を施した厩舎（10頭分）と馬場（300坪）が完成している。

この年は、また神戸高商にとっても創設25周年を迎える記念の年であった。そのため同年の春には、創立25周年の記念祭が大々的に催され、馬術部の部員も自馬5頭と神戸乗馬倶楽部より借用した4頭の合計9頭でもって、この記念祭に参加した。

記念祭当日の馬術部員たちは、各人それぞれ独自の仮装をこらしてグラウンドを駆け廻ったようである。この時に使用された衣装の大半は宝塚歌劇団からの借り物で、それを借用に宝塚まで行く「貧乏籤」を引いた学生が、その時の印象を後日以下のように記している。

「誰かが（露語の講師の、確か村田先生と記憶するが）歌劇学校の先生とお知合いで紹介状を書いて頂いた。此の時強く印象に残っているのは衣装倉庫へ入った時の白粉と体臭と汗の入り混じった何とも云えぬ臭い、又、大きな風呂敷包を担いで電車に乗った体裁の悪さであった。取りに行つた本人は下級の故を以て皆の選んだ残物で辛抱した次第である。」

また同じ年の12月16日の日曜日には、新装になった神戸高商馬場において、馬術部主催・神戸乗馬倶楽部および神戸又新日報社の後援をえて、厩舎馬場新築記念の馬術競技会が開催された。その時

のプログラムによると、大会は、午後0時30分の開会の辞によってスタートし、A・B、2組に別れての旗取競技・パン喰競技・琴平競技などが行われたが、これらの競技については、「飛入随意デスカラ御希望ノ方ハ進行係迄競技30分前ニ御申出下サイ。優秀ノ方ニハ粗賞進呈致シマス。但シ出場希望者多数ニノボル時ハ申込順ニヨリマス。」とプログラムに銘記されている。

その後、休憩15分をはさんで、馬術部員による馬場団体馬術・連続障碍飛越・単一障碍飛などが行われ、最後に神戸乗馬倶楽部・香櫨園乗馬倶楽部・灘馬術研究会・須磨乗馬倶楽部の教官たちによる模範馬術が行われ、午後4時の馬術部長田中金司教授の閉会の辞をもって大会は終了した。

尚、当日は大会の他に午後6時より神戸高商講堂において、馬に関する講演と映画の夕も同時に開催された。因に、この記念馬術競技会には、出場馬匹約30頭、出場人員約50名に達し、観衆は馬場内だけにとどまらず、道路にまで溢れる程の盛況であった。

このように順風満帆のようにみえた神戸高商馬術部も、神戸高商自体の大学昇格への動きによって、その敷地問題が発生し、昭和4年に入ると厩舎を取り払うことが決定され、1月24日馬術部員たちは、「霜深き厳寒の未明、六甲下しの身を切るような烈風を受けながら、…（中略）…やがては取壊たるゝであろう処の我等の厩舎を後に、5頭の愛馬をつれて、再び神戸乗馬倶楽部へ」戻ることとなったのである。そして再び自前の厩舎をもつことができるようになるのは、神戸高商が昇格して、名を神戸商業大学と改め、クラブの名前も神戸商業大学馬術部となって数年後の昭和11年6月のことである。